

風船ガムの少女

moriuchi toshio

森内俊雄





森内俊雄（もりうち・としお）
一九三六年、大阪に生まれる。早稲
田大学露文科卒。六九年、「幼き者
は驢馬に乗って」で第二八回文学界
新人賞を、七三年、「翔ぶ影」で第
一回泉鏡花賞を受賞する。著書とし
て他に「骨川に行く」「羊水花」「微
笑の町」「骨の火」「朝までに」「黄
経八十度」などがある。

風船ガムの少女

一九八八年八月一日 第一刷印刷
一九八八年八月五日 第一刷発行

定価一五〇〇円

著者 森内俊雄

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二・三・二八
〒102 電話(三三)二二〇一・二二一
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

風船ガムの少女
目次

青九谷	121						
ハナミズキ							
		101					
反魂香							
			89				
サラサ							
風船ガムの少女							79
食後の客					61		
笑う影						33	
口紅							7

III

トランク

131

花梨の夜

141

試みの夜

151

白い手紙

161

地を這うものごとく

171

静かな影

203

光る繭

223

揺れる梢

239

装画 木村繁之
装丁 菊地信義

風船ガムの少女

口

紅

心に片輪の蟹が一匹、棲んでいる。鉢がひとつ挽げて、そのまま生えてこない哀れな蟹がいる。それでも、あれこれ物思いの糸で生活の綻びを縫い、繕ってきて四十八年が過ぎた。堂園英生は、そんな男でいながら大学の商学部を、まずまずの成績で卒業すると、京和水産株式会社に入社して、経理部勤務一筋で通してきた。同期の友人が部長となり、そろそろ重役の席を占めようとしているのに、堂園はいまだ課長代理であるが、普段の様子からは、誰もその蟹の姿の影すらも見えたものは無い。それどころか、不器用でうだつはあがらないが、意志の強い、まっすぐな性格で、融通がきかず、立ちまわり方が下手なばかりに、損をしている人間とだけ見られて、若手の連中の、蔭での憐憫とからかいの種になっていた。

さいわい、家のローンは済ませてしまい、ひとり息子の雄至を、国立の大学に送りこませて、経済学を専攻させている。雄至は三年生になっていた。あと一年もすれば、社会人となり、堂園

のつましく切り詰めてきた生活は随分と楽になる。もしかしたら、敏く動きまわって部長となつた子沢山の同期の友人、喜多村永嗣などより、余裕のある生活が、先に展けているのかも知れない。しかし、人をあやつる何ものかは、どんなことを考え付いたのだろうか。堂園英生は、この夏から思ひの深い淵に沈んで、苦しい息をこらえていた。だが、それもまだ、誰も気付かず이었다。あるいは、気付いていても黙っているのだろうか。

秋が更け、水が澄んできた。山野に流れる川や、どこかに点在する池、沼、湖のことは知らない。大都会のただ中の、カルキの強い水道の水のことである。朝、顔を洗うために溜めた水、齒を磨くためにコップへ受ける水、朝食の前、習慣になつて一杯の飲み水が、澄んで、冷たくなつてきた。それは人を研ぐような、魂を磨き白くさらすような水である。それで、思いもひとしお沈むのだろう。そのあまり、危ないことを考えていると、深い秋の夜に、真新しい桐の切株の断面のようなものと思われ、そこから尊い匂いが漂ってくるようだった。秋には物すべてが、遙かである。昨夜、金曜日、会社から電車を国鉄、私鉄に乗り継いで、奈倉町にある自宅に戻つてきて、夜半、涼しく寒いくらいだったのが咳をして、汗をかいた。そんなとき、心の底で蟹が這いまわり、人みながうとましく、目立たぬ草の花のような妻の美与子がいとしかった。咳がおさまり暫くして、煙草を一本吸った。また、咳が出るかと心配しながら最初はそっと胸に入れたが、大丈夫のようだった。それで安心して、深々と吸う煙草がおいしかった。

「あなた」

と美与子が編み物の手を休めず、時々、テレビの深夜番組の古い洋画の再上映を観ながらでいて、匂いに気付いて言った。

「吸い過ぎないでね、軀によくないわ」

さとすように優しく言って、それから急に、手を忙しげに動かし、糸を編む無心の世界に、つつましくしりぞいたようだった。

「ああ。心配しなくてもいいよ。これで、今日は、まだ八本目だ。美与子、もともと考えると、十分の一だ。自分でも信じられない」

堂園は、正座して疲れを知らない妻の後ろ姿の足の重ねを見ながら答えた。どこかで、まだ生き残っている虫のか細い鳴き声が聞こえている。息子の雄至は、親しい友人の裕福な家に招かれて、金、土、日と泊まりこみ、月曜日の朝に帰ってくる。美与子が根を詰めて編んでいるのは、雄至のセーターである。生成りの羊毛の毛糸を買ってきて、アラン織りを急いでいる。

「それ、間に合うかね」

「ええ、充分よ」

「あと、どれくらい？」

「このまま、徹夜したら、そうね、朝には」

「美与子、それはして欲しくないね」

「はい、分つててよ、あなた」

美与子が細面に、はにかみの笑みを浮かべて、おだやかに振り向いた。二十年以上もともに暮らしてきて、互いに慣れ切り、親しんできていながら、妻は初々しく見えた。

「これ、あの子、喜ぶと思う？」

「何故、そんなこと言うんだ。考えることないよ、いや、考えないで欲しいね」

「はい」

と言った。

「あなた、ごめんなさいね」

「いや、いいんだ。私が悪い。どうしても乱暴な口のきき方になってしまうな」

堂園は、九本目の煙草に火を点けた。好きでいながら、滅多に飲まない晩酌の名残리がある。経済を考えて酒をつつしみながら、たったひとつの楽しみに、煙草を吸ってきた。

「これ、ね、あなた。明日の朝、始めれば、お昼前には出来上がってよ」

「そうかい」

「もう、寝ましようか」

居間の時計は、十一時半を指している。九時に、堂園が息子の友人宅へ電話を掛けた。厄介に

なろうとしている先方の母親が出たので、礼を言い、迷惑を詫びたあと電話の向こうで、麻雀の牌をまぜる固く冷たいざわめきの音がして、雄至が替わって出てきた。

「何か用？」

「いや、何でもない。礼を言わせてもらおうと思った」

「それだけ？ 父さん」

「ああ、それだけだ。無理するなよ、どうせ徹夜とは承知しているがね」

「じゃ、切るよ」

「いや、待ってくれ。明日、午後から母さんと町へ出る。帰りが遅くなるだろう。電話に出なくても心配するな」

「分ったよ」

「それじゃね」

「うん」

「元気で、楽しめよ」

電話はそれで切った。会社が休みの前夜は起きていて、夜を楽しむ習慣で、十一時半はまだ宵の口の感覚だが、堂園は早くベッドへ行きたかった。

「ねえ、あなた」

「何？」

「ずっとつましく暮らしてきて、よかったわ」

「美与子、それは皮肉やなじっているのではないと心得ていても、そう聞こえる。私のひがみ根性はなおらんねえ」

「そんなこと、言わないで。それでよかったじゃないの。ほら、見て」

美与子の小さな手と細い指が脂で光っている。脱脂をしていない羊毛のせいである。

「贅沢な気分よ。こんなことでも」

「これからは」

堂園は、わざとゆっくりと区切って、

「ちょっと豊かに暮らそう。馬鹿にされてきたからね。私の吝嗇は有名なんだよ、知っているかい、会社で」と言った。

「さあ、寝みましょうよ」

昨夜は、しかし、そのように言い交わしておきながら寢酒を飲んだ。それから、堂園は二十年も若返った心を燃やして、美与子の細い軀と睦み合った。今朝、わずかながら酒が残っていた。久し振りの経験で、それすらも楽しかった。土曜日、堂園英生と美与子は、伴れ立って家を出た。絹の手触わりのような秋の一日だった。腕を組んで歩く姿を見た近所の主婦が、どうしたも